



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

イスラエル・パレスチナ：ローマ法王フランシスコの訪問

ローマ法王フランシスコは、5月24日から26日にかけてヨルダン、パレスチナ、イスラエルを歴訪した。24日、法王は、最初の訪問国ヨルダンに到着し、アブドゥラー2世国王と会談した。夕方には、アンマン市内の国際競技場で野外ミサを行い、2万人以上が参加したと報道されている。法王は、イラクとシリアからの難民とも会談した。

翌25日、法王は、ヘリコプターで西岸のベツレヘムを訪問し、アッバース大統領と会談した。聖誕教会前の広場でミサを行い、約1万人が参列したほか、分離壁を視察し、デハイシェ難民キャンプではパレスチナ難民と会談した。法王は、その後、東エルサレム旧市街にある聖墳墓教会を訪問し、東方正教会コンスタンチノーブル総主教バルトロメオ1世と会談した。法王のベツレヘム、東エルサレム訪問には、レバノンのマロン派の枢機卿ベハラ・ライが同行した。またアルゼンチンのイスラーム聖職者とユダヤ教のラビが法王に同行している。

約6時間のベツレヘム・東エルサレム訪問を終えた法王は、ヘリコプターで直接イスラエルのベングリオン空港に飛び、イスラエル訪問を開始した。空港では、ペレス大統領、ネタニヤフ首相が法王を出迎えた。法王は、その後エルサレムを訪問した。26日、法王は、東エルサレムの神殿の丘（岩のドーム、アル・アクサ・モスク及びユダヤ教の聖地である嘆きの壁）を訪問した。法王は、その後、シオニズム運動の創始者テオドル・ヘルツェルの墓の献花を行い、テロの犠牲者の追悼碑に立ち寄り、ホロコースト記念館（ヤドバシェム）を訪問した。法王は、同日、ネタニヤフ首相、ペレス大統領と会談した。法王は、ペレス大統領にアッバース大統領との和平祈願のためのバチカン訪問を要請し、ペレス大統領は受諾した。アッバース大統領もバチカン訪問を受諾しており、早ければ6月6日に両者がバチカンで会うとの報道もある。

イスラエル建国後、バチカンとの外交関係は長期間にわたり樹立されなかった。両者は1992年から公式な協議を開始し、外交関係が樹立されたのは1994年6月である。同年10月、バチカンは、PLOとの外交関係も樹立した。1997年11月、イスラエルとバチカンは、エルサレム市内のカトリック関係機関の法的地位についての合意文書に調印した。イスラエルではそれまで、カトリック教会は「事実上の存在」であるだけで、法的には認められていなかった状況が同合意により修正された。ローマ法王が最初にイスラエルを訪問したのは2000年3月で、2回目の訪問は2009年5月だった。

## 評価

イスラエルとバチカンの関係は、第二次世界大戦中のナチとバチカンの関係をめぐる軋轢があり長期にわたり良好ではなかった。しかし1994年の外交関係樹立から2000年のローマ法王のイスラエル初訪問までの間にバチカン側がホロコーストの際の対応を謝罪したことで、両者

の関係は好転した。今回の訪問で法王は、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの聖地を、それぞれの宗教関係者とともに訪問した。また、前回のようにイスラエル経由の西岸訪問ではなく、ヨルダンから空路で直接西岸を訪問し、「パレスチナ国家」という言葉を使用することでパレスチナを国家として扱う姿勢をより強く表明した。さらに西岸の分離壁や自爆テロで死亡したイスラエル人犠牲者の碑を訪れ、シオニズム運動の創始者であるテオドール・ヘルツルの墓に献花をするなど、両者の間でバランスを取りながらも、政治的に微妙な場所を訪問するなど紛争当事者の感情に踏み込んだ行動をした。中東和平問題は、聖地エルサレムという宗教的要素が絡むために紛争解決が難しいと言われてきた。今回ローマ法王フランシスコは、その宗教が、フェアな立場でイスラエルとパレスチナの間でバランスを取ることができる要素にもなるということを行動で示そうとしたのかもしれない。

(中島主席研究員)

---

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799